

第11章 戦後ガールスカウトの発足と女子補導団

－占領期におけるGHQ・CIEの青年教育政策とガールスカウト－

大正時代にイギリスからガールガイド方式で導入された女子補導団は1942年に解散した。しかし、この女子青年活動は、戦後アメリカ合衆国を中心とした占領下においてガールスカウトとして新たに出発した。本章では、ガールスカウト運動と呼称されたこの団体が占領という状況下でいかなる過程で成立したのか、さらにGHQの民間情報教育局の支持もあって全国の青年教育関係者、婦人会等に紹介され、多くの社会教育関係他団体のモデルとしての役割を果たしたことについて検討する。その際、戦前の女子補導会、補導団との連続性についても比較の観点から検討したい。

以下、第1節では、占領期におけるGHQ・CIEの青少年政策－連合軍による占領状態の下で、民間情報教育局の青少年教育の展開について検討する。第2節では、女子青年団体としてのガールスカウトへの注目について考察し、その際(1)CIE・文部省の女性、少女の活動への注目、(2)ガールスカウトの理念・方法と青少年教、(3)ガールスカウトのメンバーの検討を行なう。第3節では、ガールスカウトとしての発足の背景と戦前の女子補導会・補導団の関係について考察する。その上で、第4節において、GHQ・CIEによるガールスカウト支援の組織化について確認したい。

第1節 占領期におけるGHQ・CIEの青年教育政策とガールスカウト

第二次世界大戦における日本の敗戦と連合軍による占領状態の下で、GHQ(連合軍最高司令官総司令部 General Head Quarters The Supreme Commander for the Allied Powers)による民主化政策が進められ、青少年教育の分野ではGHQ内で教育政策を担当したCIE(民間情報教育局 Civil Information and Education)主導で変革の時期を迎えた。

CIEが設置される以前の1945(昭和)年9月25日、文部省の次官通達「青少年団体ノ設置並ビニ育成ニ関スル件」が発表されている。そこには、「官製的或ハ軍国主義的色彩」の「排除」、「青少年の自発的活動」¹といった記述がある。一方で、会員の年齢、資格、役員、運営上の留意事項など青少年団体を細微にわたって規定し、「国体護持ノ精神ノ高揚ヲ図ルコト」²が留意事項としてあげられており、戦前の青少年教育に対する方針を継承している側面もある。これを女子青少年教育の視点から考えると、団体構成は「青年、女子青年及少年夫々別個ニ団体ヲ組織」³という性別の団体であるとし、「青年団体員」(男性)が14才から25才までとされているのに対し、「女子青年団体員」は25歳以下の未婚者とされている。女子青年の構成は戦前、大日本青少年団女子部の「十四歳以上二十五歳迄ノ未婚ノ女子青年」⁴という規定に連続したものである。

以上は、軍国主義・超国家主義を否定し、政府・行政による指導(官府領導性)の排除を試み、あくまで青少年の自主協同を示唆している。しかし、地域振興、国体観念、さら

に男女別の地域網羅団体の構成、という点においては、戦前からの連続性を読み取ること
も出来、それが、敗戦直後の文部省の青少年団体に対する方針であった。しかし、その後
GHQのCIEを中心とした政策により、青年教育、女子教育について根本的な改革と指
導とが行われていくことになった。

アメリカ合衆国では国務省を中心として、日本との戦争開始初期から占領統治を前提と
した対日教育政策を検討していた。その大きな方針の一つには「青年の統制と強化の排除」
にあった⁵⁶。1944年3月6日の戦略局の文書『日本の行政・文部省』では、「軍国主義
的統制の末端機能を担っていた青年団について、短期占領の場合は青年団の集会と諸活動
の禁止、6ヶ月以上の占領の場合は青年団の解散」⁷を提案している。実際、CIEの記録
をあとづけていくと、占領初期において、CIEは日本政府による青年団の再組織化に対
して強い警戒心を持ち、青少年教育に自国の民主主義的な団体運営の方法を導入するた
めの指導を盛んにおこなった。

CIEのなかで、初代の青年団体、学生活動担当(Officer for Youth Organization and
Student Activities・以下青年担当と略)のダーギン(Russel L. Durgin)による194
6年6月の文書中には、戦後日本の青少年教育の充実をはかるために、「A. B S、B. G
S、C. 4 Hクラブに類似するクラブ、D. その他の建設的な人格形成のグループのよう
なタイプのグループの目的・方法を討論するグループ会議が提案された」⁸という記述があ
り、占領初期からCIEの青年担当として具体的にボーイスカウト、ガールスカウト、4
Hクラブの導入を検討していたことがわかる。さらに、ダーギンが病氣療養で帰国した後、
1947年8月に着任したD. M. タイパー(Donald Marsh Typer)による1948年1
月記録には⁹、

ボーイスカウト、ガールスカウト、YMCA、YWCAの世界的コネクションは私た
ちの仕事を手助けすることができるプログラムを持ち、それらは、指導者の資源を得る上
で彼らを支えるものである。

と記録されている。先ほど述べた文部省による「青少年団体ノ設置並ビニ育成ニ関スル
件」で述べられていた地域青年団体については、正式な形での再結成が認められていな
かった時期のことである。ここに明らかなのは、CIEの二人の青年教育担当官は戦後日本
の青年教育を担う雛形としてボーイスカウト、ガールスカウト、YMCA、YWCAを念
頭においていたことであり、従来の地域網羅型青年団体ではなかった点である。先に述べ
たように戦前の青年団を軍国主義、超国家主義の温床として批判した際、その地域網羅的
な団体の性格をも否定し、それにかわるインタレストグループを基本とした欧米型の団体
が奨励、普及されることになった。その具体的団体として、国際的な活動をすすめるガ
ールスカウト、ボーイスカウト、YMCA、YWCAが改革すべき日本の青年団体のモデル
として注目されていくことになった。また、ダーギン、タイパーがアメリカ人でありYM
CAの指導者という経歴を持つこと、さらにこれらはGHQ全体の方針でもあった¹⁰。タ
イパーの会議録・資料を確認しても、着任直後の一年間はとりわけこの四団体との関係者

との記録が多くを占め、他に青少年赤十字（Youth Red Cross）が続く¹¹。ダーギン、タイパーの仕事において明らかなのは、第一にミッション系、国際的な青少年団体・学生活動への支援にある。ダーギンは戦前の日本と東アジア、タイパーはアメリカ国内においてのYMCAと青年教育に関する活動経験を生かし、GHQ内部、地方軍政部と日本人のこれらの団体経験者と連携していった。地域青年団体への支援について検討するのはしばらく後のことになる。

ちなみに、1946年当時のアメリカの主要な青少年団体の会員数を多い順にあげてみると以下のようなになる¹²。

団体名	会員数
アメリカ少年赤十字社	19,326,747人
ボーイスカウト	1,938,179人
YMCA	1,665,722人
4Hクラブ	1,562,622人
国際キリスト教努力団	1,500,000人
ガールスカウト	1,213,913人
メソヂスト青少年団	1,058,466人
聖母連盟	900,000人
カソリック学生団	800,000人
YWCA	666,726人
以下、全国ユダヤ人福利団、 キャンプファイヤーガール、ボーイズクラブ、 将来のアメリカ農民、が続く。	

（駒田錦一・佐藤幸治・吉田昇編『青少年教育』による）

ダーギン、タイパーの会議録等に登場するガールスカウト、ボーイスカウト、YWCA、YMCA、さらに青少年赤十字はいずれも当時のアメリカ合衆国でも大規模な団体であり、CIEが日本においてこれらの団体の育成を推奨する背景ともなった。ガールスカウトについては具体的に後述するが、来日以前にこれらの青少年運動の経験を持つCIEおよびひろくGHQの関係者が占領期の日本においてその育成と支援に積極的にかかわることも多かった。日本では、以上の団体はすべて戦中に解散あるいは機能停止におちいていたが、それぞれ戦前からの団体関係者やCIE、軍政部職員、文部省社会教育課職員、そして各団体の世界中央機関やアメリカ支部から派遣された指導者をはじめとした多様な関係者のもとで再建されていくことになった。その際、CIEはこれらの団体を民主主義的団体として人々に紹介、育成され、これらは青年団等にとってのモデルとなり、その代表的

のひとつとしてガールスカウトが注目されたのである。

補注

青年団を軍国主義と超国家主義を支えた温床として警戒し、戦後の占領期においてガールスカウト、ボーイスカウト、YMCA、YWCA等の育成を重視した指向は、東西冷戦による緊張によって、占領政策がソビエト社会主義共和国陣営を意識した「反共」という目的に向けて変化するにつれて転換していく。地域青年団の組織化を反対していたCIEも、48年中頃から「防波堤」としての観点からその全国組織化を検討するようになった¹³。1950年8月にはCIEのニュージェント (Donald R. Nugent) は、「青年団は団員の多さにもかかわらず無視されており、数の少ないBS、YWCAなどが多く紹介されている。しかし共産主義を防ぐのは青年団からであり、オフィサーの努力の90%は青年団に対してむけられるべきである」¹⁴と述べている。

ここでは、ボーイスカウト、ガールスカウト、YMCA、YWCAにのみ集中することなく、現実に大規模な団体である地域青年団に目をむけるべきことが強調されている。それによって、ガールスカウト等の日本各地で新たに育成する方向よりも、むしろ地域網羅的であった従来の青年団体にグループワークを始めとした方法論を導入し、その組織の性格を変化させることに力を注ぐ具体的な方向転換があった。その具体的手段が1948年10月から全国各地において開催されたIFELであった。GS等はGHQにとって、当初は団体そのものが、その後は方法論において、民主主義政策の普及という目的を達成するものとして期待されたのである。次節では、このガールスカウトへの注目について具体的に検討してみたい。

第2節 女子青年団体としてのガールスカウトへの注目

戦後青少年教育の出発の記録とも言える一枚の写真と記録¹⁵がある。それは1948(昭和23)年10月4日から15日まで、東京都下小金井の日本青年館分館、浴恩館で開催された青少年指導者講習会のものである。当時、教育基本法体制の発足直後であり、制度として戦後民主主義が整備される中で、それを担う新たな教育活動のありかたが問われていた。そこでは、民主的な教育理念と教育方法を普及するためにIFEL(教育長等指導者講習会・Institute for Educational Leadership)が開催された。CIEと文部省の共催で全国の大学教員、教育委員会、学校関係者を対象として行なわれ、東京で始められたこの集会はその後全国各地で開催された。この写真・記録はIFELの青年教育版ともいえるYLTC(青少年指導者講習会・Youth Leaders Training Conference)の第1回の講師、受講者によるものである。

YLTCとIFELでは、民主的な団体運営のあり方ともにグループ・ワークの普及を中心とした小集団形態での教育活動がひろく紹介され¹⁶、レクリエーション、フォークダンス、ゲームを含めた新しい活動形態がその後ひろく戦後社会教育に浸透して行く契機

となった。従来の講義形態中心ではなく、グループ単位の作業、机を囲む形で話し合い、屋外でのグループ実践の具体的なかたちは、戦前の教化運動が否定されて新しい教育形態を模索していた当時の多くの教育関係者に新鮮に受け止められた。さらに、ここで紹介されたグループワークは戦後社会教育のグループ重視、具体的な学習方法である共同学習にも発展していく出発点ともなった¹⁷。

ここに参加しているメンバーは、その後、各地域と団体の指導者として多くの社会教育関係者に影響を与えることになった。その意味からも、戦後の青年教育のリーダーとなって重要な役割を果たした人々である。あらためて、下記に本部役員名簿を提示したい。

講師	Miss Dorothea Sullivan	永井三郎（日本基督教青年会同盟）
	Miss Briesemeister	石橋宮子（日本基督教女子青年会）
	Mr. Eugene C. Newman	今井襄二
	Miss Marguerite Twohy	橋本祐子（日本赤十字青少年課）
	Mr. R. L. Durgin	
	Mr. D. M. Typer	
講演講師	青木誠四郎（文部省教材研究課長）	
	桂廣介（東京高等師範教授）	
指導講師	三島通陽（日本ボーイスカウト連盟）	
	末包敏夫（日本YMCA）	
	横山祐吉（日本青年館）	
	本庄俊輔（日本赤十字青少年課長）	
	近藤春文（文部省視学官）	
講習会本部	日本青年館（欲恩館）	
	増田弥太郎 雨海明 成田久四郎 清水泰雄 小野秀一 佐藤清子	
	文部省	
	前田偉男 伊藤英夫 金田智成 青村邦三 廣田玲子	

以上、CIEの派遣講師を筆頭にYMCA、YWCA、青少年赤十字、ボーイスカウト関係者が多く出席していることがわかる。しかし、この本部名簿では読み取れないが、この講習会の直前（1948年6月）に戦後の正式発足にむけて準備委員会を立ち上げた日米のガールスカウト関係者がこの講習会の中心に位置している。

例えば、CIE講師としてのサリバンは、アメリカ合衆国から派遣された心理学者であり、同時に合衆国ガールスカウト連盟の理事であり、M. トゥーイも合衆国ガールスカウトから日本のガールスカウト支援のために直接派遣された理事として、ともにグループワーク理論を中心とした指導をおこなった。少年赤十字の橋本祐子は1948年6月からのガールスカウト中央準備委員である。空軍将校の妻として来日したコーキンス

(Mrs. Harriet Colkins) もガールスカウトのトレーナー経験を生かし、この講習会をはじめ多くのガールスカウト講習を担当している。なお、サリバンはガールスカウト養成に限らず、タイパーとともに地方の I F E L、Y L T C の指導者としてこの後、全国各地の地域青年団対象の講習会等も担当するのである。また、注目すべきは写真と記録を確認するとアメリカ合衆国からの講師団、C I E スタッフを囲むように、戦後ガールスカウトの指導者となる人々を多く確認できることである。具体的に、確認できただけでも次のメンバーが出席している。

- D. サリバン (Y L T C 講師 合衆国ガールスカウト連盟理事)
- M. トゥーイ (Y L T C 講師 合衆国ガールスカウト連盟派遣講師)
- H. コーキンス (ガールスカウト講習会講師 ニューヨーク組織のトレーナー経験)
- 橋本祐子 (少年赤十字・ガールスカウト日本連盟中央準備委員)
- 三島純 (すみ・戦前、女子補導団副総裁、戦後ガールスカウト日本連盟初代会長)
- 宮原寿子 (林富貴子補導団総裁の長女、ガールスカウト日本連盟第三代会長)
- 大木千枝子 (千葉県社会教育課、初代ガールスカウト日本連盟プログラム委員長)
- 原喜美 (関東軍政部教育顧問、ガールスカウト日本連盟初代総主事)
- 内城千鶴子 (ガールスカウト日本連盟岩手支部)
- 塩野幸子 (タイパー通訳、ガールスカウト日本連盟初代東京都支部長)
- 芹野 (小崎) 朝子 (日本基督教団、ガールスカウト日本連盟第 2 代プログラム委員長)
- 黒瀬のぶ (元女子補導会第一組、ガールスカウト日本連盟中央準備委員)

上記のメンバーから次のことが理解される。

- ①戦後の青少年指導者講習会の主たるアメリカ人講師のうち 2 人は合衆国ガールスカウトの理事で、特にトゥーイは合衆国ガールスカウト連盟から派遣された人物である。
- ②三島純、宮原寿子、黒瀬のぶは女子補導団の経験者である。このうち、三島は副総裁、宮原は総裁をつとめた林富貴子の長女 (富貴子は戦時中に逝去)、黒瀬は大正期に日本にはじめて導入された香蘭女学校第一組の第一期生であり、戦前のガールガイドの主要メンバーが参加している。
- ③少年赤十字の橋本祐子、タイパー通訳の塩野幸子、関東軍政部の原喜美、岩手の内城千鶴子、千葉の大木千枝子は C I E、地方軍政部の関係から戦後ガールスカウト運動に参加した人物である。
- ④戦前の女子補導会、補導団運動の実践面での指導を担当したイギリス人女性宣教師は参加していない。

以上から、戦後青年教育指導の出発点とも言えるこの講習会において、多くのガールスカウト関係者が参加していること、その内訳は、アメリカ合衆国からのガールスカウト理事、戦前の女子補導団の中心メンバー、C I E・地方軍政部の関係から戦後にガールスカ

ウトに参加したメンバーという複合した構成になっていること、がわかる。しかし、イギリス人ガイドの参加はなく、アメリカ式のガールスカウトとなっていることが確認される。

この講習会はもちろん青年教育関係者全体を対象としたものであり、多くの地域青年団関係者に加えて、ボーイスカウトから三島通陽、関忠志、村山有（たもつ）、YMCAから永井三郎、YWCAから竹内菊枝等が参加している。しかし、ガールスカウトは一団体として、しかも講習会当時に戦後ガールスカウトが正式には発足していなかったことを考え合わせると、際だって多い数であり、「中央」に位置していることがわかる。その際、なぜ、第一回の青少年指導者講習会にガールスカウトの関係者が多数参加しているのか、という問いが生まれる。

戦後青少年教育の出発ともいえるこの第一回青少年指導者講習会において、ガールスカウト関係者が多数参加している背景には次の三点が考えられる。

(イ) CIEおよび文部省が戦後の青少年教育を展開する際に、女性、少女の活動に注目したこと、また注目する必要があること。

(ロ) ガールスカウトの活動理念と方法が、当時、求められていた青少年教育のあり方として期待されたこと。

(ハ) ガールスカウトのメンバーそれぞれが個人的にも講習会を主催したCIEおよび文部省に支持され、期待された人々であったこと。

以下では、それぞれについて考察を試みたい。

(イ) CIE および文部省が戦後の青少年教育を展開する際に、女性、少女の活動に注目したこと、また注目する必要があることについて。

GHQ - SCAPの最高司令官であったマッカーサーは、日本占領直後の1945年11月、五大改革指令を行っており、そのひとつは、「婦人参政権賦与」であった。新憲法には男女平等が明記され、教育基本法・学校教育法にもとづき、義務教育諸学校における男女共学が実施された。しかし、男女共学の原則は、そのまま男女合同の教育機会を意味しない。それまで普通選挙権、さらに男性と同様の教育機会を持たなかった女性に対する公民権実質化の課題をどう考えるか、また、戦前において中等教育以降の教育機会が中学校と高等女学校とに区別され、大学進学の道が閉ざされていた女子の教育機会の整備を具体的にどう実質化するか、という課題があった。そこでは、戦後民主主義社会において活躍することが出来る女性の青少年、成人をふくめたひながたが必要であり、そのひとつとしてガールスカウトの活動とそこで育成された女性像が選ばれたという理解である。

組織の上で女性の指導者による女性を対象とした教育であり、イギリスおよび合衆国で発展したという歴史的経緯を持つガールスカウト活動は、占領下における女子青少年教育のあり方として注目され、そのグループワークを中心とした方法は多くの教育場面での応用が計られていくことになったと考えられる。

(ロ) ガールスカウトの活動理念と方法とが、当時、求められていた青少年教育のあり方として期待されたことについて。

ガールスカウトはイギリスのガールガイドにはじまり、もちろんボーイスカウトから分化したパトロールシステムを中心とした活動である。ボーイスカウトと同様に6人から8人での小集団活動をすすめるパトロールシステムはイギリスに始まり、アメリカ合衆国を含めた世界各国に普及定着していた。パトロールシステムにおける小集団活動の原理は1930年代に新教育の方法としてグループワークにも発展していった。戦後初期、占領下の日本において、それまでの超国家主義と軍国主義が徹底的に否定され、民主主義が標榜された。それによって、戦前日本の「号令一下」の上位下達を連想させる講義・講演方式と地域網羅性で全員加入を原則とした方式にかわる青少年団体の経営方法が求められていた。明治以降の日本の青少年教育は地域青年団の官製化、また実業補習と壮丁準備教育を中心として組織化されてきた。その中で、戦前の文部・内務省さらに軍部の影響下にあった地域青年団に変る存在が求められていたのである。そこにグループワークが導入の必然性が生まれ、インタレストグループを基礎とした任意加入であり、パトロールシステムを中心としたガールスカウトが期待されたと考えられる。

その際、ボーイスカウト＝少年団ではなく、なぜ、ガールスカウトかという問いが生まれる。それは、戦前においても少年団は強固で広い組織をもち、特に女子の活動は小さなものであったこと、それゆえにガールスカウトに力点をおいたことが理解される。実際、1948年時点においてボーイスカウトは条件付ではあるが、CIEからその組織的結成について承認を得ていたのである。一方で、日本のボーイスカウト運動がいくつかの系統を持つが、少年団運動として軍関係者との関係を強く持ちながら、取り入れられていた経緯を考える必要がある。戦前において指導者の考え方の違いから、少年団日本連盟、帝国少年団協会、さらに海洋少年団＝シースカウト等、複数の立場に分かれていたが、男子対象ゆえ、当然、兵役と壮丁準備の課題と無縁ではなかった。ボーイスカウト方式の日本への導入に際しては、乃木希典、東郷平八郎、田中義一などの軍人・政治家の介在もあって陸海軍関係者のつながりも存在し、戦前・戦中の軍国イメージ強かった。実際、少年団日本連盟、帝国少年団協会は、第二次世界大戦中に、総力戦、本土決戦を視野においた大日本青少年団に吸収統合されている。占領初期のGHQ - SCAPが超国家主義、軍国主義の排除を戦後改革の課題に掲げ、そこに関与した団体の解散と役員の本職追放をすすめる中で、ボーイスカウトは動きにくい面があった点は否めない。少年団日本連盟の立場から後に戦時中に大日本青少年団の副団長を努め、戦後はボーイスカウト日本連盟の総長と三島通陽においても戦後初期の段階において、しばらく前面では活動していない。その点からも、妻の三島純が中心メンバーのひとりとなってガールスカウトを担当したとも考えられる。

ガールガイド・ガールスカウトは女子が対象であり、加えて戦前は規模の小さい活動であったため、戦前の日本軍部の介入も少なかった。むしろ、戦前イギリス・アメリカ式の活動を堅持して教会と学校関係者には弾圧が行われた、という「大義」があった。

(ハ) ガールスカウト・メンバーはそれぞれが個人的にも講習会を主催したCIEおよ

び文部省に支持され、期待された人々であったこと、について。

それは、ガールスカウトの前史となる女子補導会・補導団の戦前の導入経緯にもかかわる問題である。ガールガイドはイギリスから導入された際に、日本聖公会の関係者によって多くが担われ、イギリス、さらにアメリカ合衆国のキリスト教関係者との結びつきが強かった。戦前の日本において、この運動はイギリスから直接ガールガイドとして導入され、発足していた。1920（大正9）年以來、ガールガイドは女子補導会、補導団と翻訳され、主にイギリス国教会である日本聖公会系の学校および教会を中心として活動を継続し、一定の定着をみていた。聖公会との結びつきが強かったという事実においては、男女の違いのみではなく、軍関係との結びつきが存在したボーイスカウト、少年団とは明確に異なる点であった。

補導会・補導団はキリスト教系の学校と教会を中心とした活動であったため、指導者およびそこで学んだ生徒たちはキリスト教を中心とした欧米文化に通じており、英語に堪能であり、教会の牧師や学校の外国人宣教師との交流をもち、さらにYWCA等を通じてキリスト教関係者との結びつきは国内外にひろがっていた。CIEの青少年活動および学生活動の担当者をつとめたダーギン、タイパーはともに前職はYMCAの主事であり、とりわけダーギンは戦前の日本において長い活動経験を持っていた。補導会・補導団の活動経験者にはダーギン、タイパーをはじめとしたCIEおよびGHQ-SCAP内の他部局との知遇を持つ人々も多く存在したのである。

このような前史があるガールガイドを含めたガールスカウトへの期待こそが、戦後初の本格的青少年教育の指導者講習会の中央に日米のガールスカウト関係者が位置することになった。それは、CIEによる日本の戦後女子青年教育におけるガールスカウトへの期待であると同時に、ガールスカウトの持つ理念・方法・内容の他の青年教育団体への応用の意味をもっていた。

第3節 ガールスカウトの発足と戦前の女子補導会・補導団の関係

本節の目的は、戦後日本でガールスカウトが発足する際の戦前の女子補導会・補導団との関係についての検討にある。アメリカを中心としたGHQとの関係配慮から、名称はアメリカ式に「ガールスカウト」に変わった。戦前の女子補導会、補導団はイギリス連盟の一支部として出発し、イギリスの女性宣教師を中心としたガイド指導者のもとですすめられたため、名称も「ガールガイド」を翻訳した形になっていたが、戦後は、事実上、アメリカ合衆国占領下の再建となったため、名称も米国式の「ガールスカウト」と名乗ることになったのである。

『半世紀の歩み』等、日本ガールスカウト連盟発行の資料には、中央部の再建は、ボーイスカウトの三島通陽を通して元補導団関係者を集めるようにというGHQの意向が伝えられたこと、また、通陽の妻で元補導団の副総裁であった三島純が元補導団関係者と連絡を取り、1947年1月、青少年担当官ダーギンと話し合いの場を持ったのを機に中央準

備委員会が結成され第一歩を踏み出した、と記されている（補導団総裁であった林富貴子は44年に死去している）¹⁸。その経緯について、『半世紀の歩み』には次のように記されている¹⁹。

1947年（昭和22年）、ボーイスカウトは国際的なスカウト運動がこのような時代こそ必要であるとの判断からマッカーサー元帥と再建の折衝を重ねていました。

同じころ、ボーイスカウトの三島通陽総長をとおして、日本のガールスカウト関係者を集めるようにとの意向がGHQから伝えられました。元補導団の副総裁であった関係から、三島純夫人はさっそく旧友との連絡をはかりました。

元総裁の林ふき子夫人はすでに他界、戦災で住むところも変わってしまった人、田舎へ疎開している人も多く、やっと宮原寿子、溝口歌子、黒瀬のぶ、西野邦子、井原多美子の人たちが集まったのは、同年1月、女子補導団が解散してから10年（ママ）ぶりのことでした。－中略－

民間情報教育局青少年教育顧問ダーギン氏を囲んでの話し合いは、みんなに勇気と決心を与え、中央準備委員会の発足に踏み切らせました。この知らせは、友から友へと伝わり、また新しい協力者も現れて当初は三島宅を中心として宮原宅、松涛幼稚園などに集まりました。そのご、ダーギン氏の後任にドナルド・タイパー氏が着任、そのアドバイザーとして働いていた塩野幸子がガールスカウトを援助するため、たびたび会合に出席するようになりました。都庁の一室で開かれた会合では、ミス・ウーレイ、宮原寿子、橋本祐子、三島純、林貞子が出席して趣意書、規則書、ピン、ネッカチーフの草案からハンドブックの作成、歌集の企画まで話し合いました。

上記からは、ガールスカウトの中央本部の結成と組織化にはCIEの強い意図が働いたこと、ボーイスカウトとの関係で三島夫妻がその連絡をになったこと、戦前からの女子補導団のメンバーにも呼びかけが行なわれたこと、CIEの青年教育のオフィサーであるダーギン、タイパーの支援があったことが理解される。

全国組織であるガールスカウト日本連盟は1949（昭和24）年4月4日に発足する。それ以前、1947年1月に、「日本女子補導団時代のガールガイド三島純、宮原寿子、黒瀬のぶ、西野邦子、井原多美子、溝口歌子等が中心となって、ガールスカウト中央準備委員会」²⁰が結成され、1948年5月にはイギリスから再来日したA. K. ウーレイによる講習会、合衆国ガールスカウトでトレーナー経験のあるコーキンスによる養成講習会も開催された。前節で述べたように、1948年10月、日本のガールスカウトを支援するために派遣されたM. トゥーイは、第1回青少年指導者講習会に講師として指導を行ったが、彼女は全国のガールスカウト養成講習を行なうため来日した人物であり、それ以降、運動の基盤構築が本格化し、旧補導団員や戦後に新たに加わった人々などによって体制が整備されていった。以下、本節では、ガールスカウトが正式に発足する背景についておいて、戦前の関係を視野に、（1）ボーイスカウト・ガールスカウト結成と三島純、三島通陽

夫妻、(2) 女子補導会・補導団メンバーとミッション・ガイド、の2点から考察を行なっていきたい。

(1) ボーイスカウト・ガールスカウト結成と三島夫妻

戦前、戦中の三島通陽は大日本青少年団等の役職を歴任したが、公職追放を受けることなく、戦後は文部政務次官を経てボーイスカウト日本連盟理事長をつとめている。妻の三島純および長女の昌子によれば、占領期においての通陽は戦前からのひろい交流関係を生かし、「GHQのスタッフに対して、(祖父の時代から所有した) 西那須野の別荘でホスピタリティをもっておもてなしをした」(カッコ内筆者)²¹。「民間情報教育局からエルワース中佐を皮切りに、タイパーご夫妻、ウィリアム氏、テイルトンご夫妻、フィンネル氏、他ハワイ生まれの二世は、それぞれ戦前からお父さんとの交友があったので、息子達は進駐軍のG Iであっても那須へはジープを駆って大喜びでやって来て純日本式の生活を満足して帰って行きました。このように、戦後の我が家は、戦後ゲストハウスとしての役目を十二分に果たしたのでした」²²とは、昌子の記述である。昌子の著作²³には、併せて、P. マッカーサー(総司令官D. マッカーサーの従兄弟)との戦前からの文通をはじめ、通陽とGHQスタッフとの交流が具体的に記録されている。通陽はP. マッカーサーが「ポスト・キング」と名付けるほどの郵便物に丁寧な人物でもあった。その交流の過程で、ボーイスカウト、ガールスカウト再建の交渉も行なわれ、「日本の〈やくそく〉と〈おきて〉や、記章(エンブレム)の制定等について、米軍を納得させる」²⁴ことに苦心した。

ちなみに、戦後ボーイスカウトの結成状況は次の通りである²⁵。

- 1945年11月 神田YMCA会館でダーギン来日の歓迎会
内田二郎(戦前・弥栄ボーイスカウト)合衆国ボーイスカウト出身の村山有、鳴海重和とGHQ内部のスカウトについて情報を得る。
その結果、三島通陽(文部政務次官)と再建を協議。
- 1946年2月 銀座の交詢社ビルでスカウト再建のため第1回スカウトクラブ開催。
(三島通陽、内田二郎、村山有、鳴海重和と二世スカウトの出席)
- 1946年3月 第2回以降は品川の森村学園でスカウトクラブ会合。
(これ以降、二世スカウト、GHQ関係者、ダーギンの参加)
ーこの間、京都・大阪でも中野忠八、古田誠一郎、今田忠兵衛、中村知と元合衆国スカウトのフェッターらとの協議活動始まる。
- 1946年6月 東京のスカウトクラブから関西のスカウト関係者への支援要請
- 1946年12月 CIEからボーイスカウトとしての再建承認
- 1947年1月 東京に5隊、横浜に1隊のスカウト結成
- 1947年3月 明治神宮外苑広場で第1回ラリー開催
(明仁皇太子、ダーギン、第8軍ソープ大尉の参加)

—臨時中央理事会の開催、規約、ちかいとおきての制定作業、指導者講習会始まる—

- 1948年4月 三島通陽、第一回参議院選挙に当選（全国区）
- 1948年1月 D. M. タイパーを講師に東京で公認指導者講習会
- 1949年4月 ボーイスカウト日本連盟の発足（4月1日）

GHQ-CIEは、当初、大日本青少年団を軍国主義の関係団体と判断し、そこにかかわった少年団及びボーイスカウトの再建運動を容易には許可しなかった。しかし、日本側の再建希望者、CIEのダーギン、タイパーの援助、合衆国ボーイスカウト経験のある日本人、二世スカウト、GHQ・SCAP内部のボーイスカウト出身者の協力もあって、ボーイスカウトとしての再建組織化が進んでいったこと、その中心に三島通陽が位置したことがわかる。少年団の名称ではなく、ボーイスカウトの名称で再建することが三島の提案で決定され、その再建が占領関係国の間で内諾を得たのである²⁶。1946年12月のボーイスカウト結成に関するダーギンからの支持は次の通りである²⁷。

ボーイスカウト再編成についての指示

1. 諮問または保証委員会の構成

ボーイスカウトの経験ある者で、この最初の集団の保証をなし得る少数男子のグループであること。このグループは、日本人3、4名とアメリカ人1、2名とを包含されたく、かつ、この委員会は来週以内くらいには任命され、会合を催す計画をされたいと希望する。

2. 指導者

正規の指導者を選ぶために十分なる注意を払うべきこと。選出については保証委員会によって慎重に論議されたきこと。

指導者は、ボーイスカウトの経験を有するとともに、以前のいわゆる「青少年団」とならん関係のない青年であること。なお、できれば英語の会話の心得があることが望ましい。指導者は、この仕事の発展のために、この冬相当の時間を提供することが可能であるか、またはすすんで提供されたきこと。また、かれは、自治精神訓練の基本的原理ならびにボーイスカウト綱領中の個性形成の諸目的を完全に理解しているべきこと。

3. 少年のグループ

少年たちを選抜するために多大の注意を払うべきこと。かれらはだいたい同年輩でありたく、とくに12歳より14歳までがのぞましい。かれらの学校を異にするも可であるが、容易に集合せしめ得るように、各自近隣に居住しているべきこと。

4. 会合の場所

このことは重要であり、細心な考慮を払われたきこと。

5. スカウト指導者の訓練課程

将来の発展に対する準備として、所定の課程に向って歩をすすめられたきこと。

ここでは、ボーイスカウトの経験を重視し、日本人とアメリカ人の協力による運営を視野におき、また戦前の大日本青少年団との断絶を指摘した慎重な運営と訓練プログラムの確認が行なわれていた。この点は、第2節で述べたような男子の団体に対する「警戒心」も理解される。

ガールスカウトとしての再建活動、結成活動が進められるのは、ボーイスカウトの動向と対応している部分が多々ある。その点、ボーイスカウト結成の中心となった三島通陽の妻、純は食糧難と混乱を避けて生活していた西那須野の別荘と代々木上原の自宅を往復しながら、ガールスカウト結成準備をすすめている。1947年初期からは自宅を中央準備委員会の住所として活動を開始しており²⁸、そこは、通陽を通じて得られるCIEからの情報と指示と接点としての活動が可能な場でもあった。また、代々木上原付近には、林富貴子総裁の自宅の外、三島純の親戚、縁戚者が多く居住していた。この時期に、華族会、女子学習院の同窓会メンバーを通じて、林富貴子の長女である宮原寿子（ガールスカウト日本連盟初代第一副会長）、林貞子、鍋島敬子（第4代・第6代会長）、伊藤幸子（第6代会長）、藤村千良（元、少年団少女班）等に参加と協力を依頼している。

また、三島純は戦前の女子補導団副総裁の経験から多くの補導団関係者との連絡も行なっており、1947年1月22日に戦後第1回のガールスカウト結成にむけた会合をタイパーのもとで行なったときの呼びかけも純が行なった記録がある²⁹。GHQ-SCAP資料において、この47年1月22日にガールスカウト関連の会合として記録されている³⁰。この22日の会合の参加者はCIEのダーギンと通訳の塩野幸子、元補導団の三島純、溝口歌子等5名（他に元少年団キリスト教少年団女子部、赤十字関係者、元天理教少年団女子部1名）であった。以上のように、戦後ガールスカウトの出発には、戦前の女子補導団副総裁を経験し、ボーイスカウト再建を進める三島通陽の妻という位置もふくめ準備を行いCIEとの交流を維持していた三島純が重要な役割を果たした。

補注：

タイパーの会議録³¹によれば、並行して、CIEのダーギンと塩野が後援した「study committee for girl's group education」と名付けられた会合が記録されており、1947年には、この1月22日の会合以外にも、少なくとも2月に3回女子青少年教育関係者（22日の出席者、児童館、赤十字、YWCAのミルドレッド・ロー（Mildred Roe）、学校教師、東京都社会教育課の中野ツヤ、文部省の山室民子等）を集めての会合が記録されている。またこの研究委員会で女子グループワーク指導者養成会議を開催することを決定、同準備委員会が発足し、3月29・30日に小金井の浴恩館で開催された。

(2) 女子補導会・補導団とミッション・ガイド

前項に述べたように、戦後、ガールスカウト・ボーイスカウトの発足に三島純、三島通陽夫妻の果たした役割は大きい。それでは、戦前の女子補導会・補導団を立ち上げた聖公会関係のメンバーの役割はどうであったか、考えてみたい。先に、1947（昭和22）年1月に、三島純の呼びかけでガールスカウト発足準備の第1回会合が開催されたことを確認した。それ以前に、三島純がCIEから、あるいは三島通陽を通じたガールスカウト結成に関する指示があり、交流があったことは推察される。

それでは、聖公会関係の女子補導団であったメンバーについてはどうであろうか。彼女たちにとっての困難は、日本人として戦前の女子補導会時代から実践的指導者の代表である檜垣茂が1945年12月に疎開先の福島で亡くなっていること、イギリス人女性宣教師たちは、戦後直後のこの時期にはGHQの許可が下りないため、来日できなかったことである（実際、再来日するのは1947年末から1948年以降が大多数である。また、再来日していないメンバーも存在する）。加えて、連合軍軍といっても実質的にアメリカ合衆国を中心とした占領であり、当初よりガールスカウト方式が想定されていた。

そんな中、1947年以前にもダーギンと旧補導団関係者の一部が接触をはかっていた資料がある。それは、1946（昭和21）年2月5日のDorothy Mizoguchi（戦前、女子補導団東京第2組・聖アンデレ教会、溝口歌子のクリスチャンネーム）からダーギンへの手紙³²がそれである。

Zushi

Feb. 5, 1946

Dear Mr. Durgin

I have been laid down with cold for the past five days and have just managed to get up enough energy go up to Tokyo. As I have been away from the laboratory for so long, I can't possibly get away today. Will you please forgive me?

In the mean time, I have written to one or two girls whom I thought might be interested in such work. Some of them might turn up.

One of them in particular, Miss Hana Kawai of Keisen girls' School (Miss Michi Kawai's niece or something) may have some good plan. The Keisen has a very good recreational facilities and the girls there go in for a lot of gardening, sports and chorus work. Perhaps you know already.

Miss Tamiko Ihara wrote to me the other day that she may not be able to come to the meeting today but was sending a Miss Reiko Yoshida, who is in charge of a girls club of St. Andrews' Church in Shiba.

I don't know what you think about it but to people like us who have been used to the Girls Guides systems it would be much easier and less of a trouble if we could run the new movement on the same principle. Of course, there must be lots of

changes made to suit the present conditions but the old, familiar Guides or Scouts seem just as good today.

As I've told you last time, it would be better if you could have the American Girl Scouts or the Youth Hostel Organization people to come over here and start a movement.

The young girls of today know nothing of these movements and as "Seeing is believing" - - -, it might speed up the present work considerably. I know they have already done this in Europe and picking up the severed thread. We might get the British Girl Guides to do that, too.

However you probably have some concrete ideas of your own. I only wish I could help you more but I just haven't any time nor energy to spare. Just carrying on my experiment and trying to make a decent living takes up all my time and energy. I certainly aim burning the candle at both ends but what else can I do? It's sink or swim and I'm still young enough to want to do all in my power to make life worth living and to see this country of mine established once again.

Please excuse me for running on like this. I hope today's meeting is a success. Please give my best regards to all those present today.

Yours faithfully

Dorothy Mizoguchi

この手紙から、溝口はダーギンに、この日の会合には出席できないことを謝罪し、河合みちの経営する恵泉女学校と姪の河合はな、女子補導団で一緒だった井原たみ子と芝の聖アンデレ教会の吉田れい子、を紹介している。彼女自身は日々の生活に余裕はあまりないものの、ガールガイド・ガールスカウトを超えて、ダーギンが発足を検討していたガールスカウトへの協力を申し出ていること、さらに、この手紙以前にガールスカウト、ユースホステル等について話しあいをしていることが理解されるのである。ガールガイド、ガールスカウトに変わらず協力をダーギンに申し出ており、また、聖公会のアンデレ教会で洗礼を受けていた立場から溝口歌子が同じクリスチャンのメンバーを推薦していたことが理解される。

ガールスカウトの中央準備委員会準備委員会は1947年1月とされているが、その一年前から溝口がガールスカウト・ガールガイドの発足にむけてタイパーと人材も含めた話し合いを行っていたことが確認される。補導会、補導団に中心のかかわった聖公会メンバーの活動と人間関係は、三島たちとは別に注目したい大きな要素である。しかし、戦前の女子補導会、補導団を担った東京女学館、大阪のプール、神戸の松蔭の各学校でガールスカウトが復活することはなかった。香蘭女学校は、旗の台の校舎が戦災を被ったため近く

の九品仏の寺院境内で授業を開始していたが、本格的に東京第1組として活動を行なうのはヘールストン、ウーレイが再来日した1948年のことである。したがって、ガールスカウトの本部再建には初期において積極的関与はしていない。

戦前のミッション・ガイド、女子補導会、補導団メンバーの戦後ガールスカウト結成への関与については下記の資料を参照されたい³³。これは、1949年3月ガールスカウト日本連盟が正式発足する直前に、黒瀬（細貝）のぶから戦前の補導会・補導団関係者に送付された手紙の原稿である。黒瀬は香蘭出身であり、女子補導会第1組が1920年に発足した時の第一期生でもあり、アンデレ教会の東京第2組を担当、その後、聖公会主教の黒瀬保郎と結婚して茂原聖公会時代は茂原少女会を組織している。戦後は、IFELにも参加し、鎌倉のミカエル教会のガールスカウト、ガールスカウト日本連盟のプログラム委員としても活躍し、M. トゥーイとの親交も戦後長く続いている。下記の文は、1949年4月4日の連盟発足前の呼びかけである。

おなつかしいガイズの皆様、御元気ですか。

戦後・元ガール・ガイズがスカウト運動として新しく活動を始めました。

全国的に普及して、日本再建に役立とうとするのでございます。

ガール・ガイズ及ガールスカウト世界聯盟を代表してアメリカ合衆国からミス・チュウイが派遣され、本部の組織を作り、全国の指導者養成を始めて居られます。

四月四日には、丸之内のエデュケーション・センターに全国総会を開き会長其の他本部の役員の選挙を致します。

この際故桜垣先生、ミス・ウーレーへの御恩に報じるためにも、御国の為に、私共クリスチャンガイズがそれぞれの立場から無理のないお手伝いをさせて頂き度いと話し合っています。

特に日本の現在及将来にスカウト運動がどんなに重要な役割を持つかを、私達こそよく理解できることを想います。

現今の世相をみて、思想的に、文化的に又一番正しい信仰の立場からも必要を感じるのでございます。

ゲームの中で楽しみ乍らこの難しい世の中で神と互と他の人への奉仕を念願とするこのスカウト運動が私共信徒によって奉仕されるのは当然のことと思います。

ミス・チュウイ、ミセス・コーキンスも聖公会の由、本部の総主事原キミさんもクリスチャンです。総会では大久保主教夫人、吉田澄子（桜井）さんを本部の役員に推挙いたして居りますからご記憶下さいませ。

東京十二団のリーダーの中、池田（二）、巽（五）、戸村（十二）、香蘭のリーダー数名、立教のリーダー数名（聖公会員）、小崎（日基）、山之内・和智（マ）等殆ど大多数のリーダーは教会関係であります。（マ＝立教マーガレット教会・筆者）

聖公会教会関係ガール・スカウト

地方

- 1 栃木第一団 小山聖公会 主教夫人 大久保淑子 リーダー
- 3 千葉第一団 市川聖公会 牧師夫人 松本信代 香蘭の先生
- 4 茨城第一団 水戸聖公会 新家寿美子 教会幼稚園保姆
- 5 山形県第二団 山形聖公会 片岡靈恵 牧師令嬢 保姆
- 7 福島県 会津聖公会 牧師 山本夫人（未登録）
保姆 菊池夫人
- 2（神奈川第二 鎌倉聖公会 聖ルカ幼稚園 保姆 北川恵美子）
- 6 四国 徳島 ミス・ボックス（未登録）

東京都内

- 1 東京第一 香蘭女学校 ミス・ウーレー
後藤八重子 小林保子 立入陽子 志賀
- 2 東京第二 目白聖公会 池田木実子 松下荅子 栗山孝子
- 3 東京第五 成城聖愛教会 巽芳香 鈴木千歳
- 4 東京第八 立教マーガレット教会 牛島寿子 矢崎美恵子 細野能子
黒川美佐子
- 5 東京第十二 神田末広教会 戸村富子

ここでは、イギリスのガールガイド方式の女子補導団がアメリカ合衆国のガールスカウト方式で発足しつつ中で、それは日本の女子青年教育にとって重要であること、戦前の榎垣茂やウーレイの指導を受けた人々にその経験の重要性と協力を呼びかけたものである。また、アメリカ人講師のM. トゥーイ、H. コーキンスが合衆国の聖公会員であることを伝えたくて、ミッション・ガイドの結成状況とメンバーを示し、本部役員選挙での吉田澄、大久保淑子への協力を呼びかけているのである。

この呼びかけ文からは、黒瀬のぶは夫の黒瀬保郎と池袋の聖公会神学院に居住しながらガールスカウト日本連盟設立のための中央準備委員会に協力し、あわせて聖公会関係者と協議を続けていたことがわかる。戦前から香蘭、東京女学館の補導団を担当したウーレイ、ヘールストーンが再来日した以降、次の会合を行なった記録がある³⁴。

○1948（昭和23）年2月22日（シンキング・デー）

ミス・ウーレー、ミス・ヘールストーン歓迎会

高輪泉岳寺前 カーネル・シャープ邸 十数名出席

○1949（昭和24）年3月12日 相談会

池袋聖公会神学院構内 黒瀬宅 出席者 西沢、井原、吉沢、柴山、西野、黒瀬

○1949（昭和24）年4月23日 午後十一時より二時まで 相談会

ここでは、女子補導会・補導団を経験した聖公会のミッション・ガイドたちが日本連盟正式発足と前後して協議を重ねていたことがわかる。その際、作成されたのが次の「ガール・スカウト後援会員（旧団員）名簿」である（メモに記された施設、氏名より筆者作成した）³⁵。

アンデレ教会関係	細貝ナオ(東 1)	石黒(東 4)	井原 権戸
目白 女子大関係	西沢 吉澤	長嶋	
女学館関係	柴山(東 4)	森竹(東 4)	目賀田(東 4)
三光教会関係	入江静子	大久保	村田美恵
大森聖公会関係	松田敬子	堀内	伊藤
聖三一教会関係	谷川	小島	
聖ルカ病院関係	竹田ルツ子	高橋シュン	
聖愛教会関係	吉田澄子(東 1)	桜井くに子(東 1)	
千葉市川聖公会	松本信代(東 1)	田中邦子	
栃木	大久保淑子	岡田淑枝(大宮)	
毛呂	アプタン(大宮)	金井シメ(大宮)	植松敬子
下福岡	飯田あさ子		
和歌山	三田庸子(東 1)		
山形	片岡タマエ	霊江と御母さん	
水戸	新家寿美子		
香蘭	森山有美子(竹井)	(東 1)	右田トキ子(弥永)(東 2)

これらのメンバーは戦前の女子補導会・補導団の東京第1組、第2組、第4組、大宮第1組のメンバーであり、あるいは戦前からの聖公会の教育活動の参加者である。前出の呼びかけ文のガールスカウトの新設した団、担当者とおわせみたとき、聖公会の教会、関係する教育機関に多くのミッション・ガイドたちが協力する体制が計画されていたことが理解される。なお、戦前の補導会・補導団の中心的担い手であったイギリス女性宣教師は戦後日本に再来日後した人物でもガールスカウト再建の中心的担い手とはなっていない。例えば、香蘭女学校のA. K. ウーレーは48年5月の講習会やプログラム作成など、連盟の仕事に協力するが、主要な役職等には就いていない。

以上、本節では、戦後ガールスカウト結成の背景に、(1) 戦前の少年団、女子補導団の本部役員であった三島夫妻の役割、(2) 女子補導会・補導団員の経験をもつミッション・ガイド、聖公会関係者の役割について述べた。その上で、CIEの青年教育担当であるダーギン、タイパー等の指導、援助があったことを確認した。

補注：

戦後アメリカ式にガールスカウトが発足したことについて、戦前の女子補導会・補導団員から明確な批判はなかった。イギリス人女性宣教師のウーレイは戦前、戦後を通じてガールガイド、ガールスカウト双方を指導した数少ない外国人女性であったが、戦後もガールスカウト日本連盟のプログラム委員として活動充実につとめている。

しかし、戦後初期にウーレイの指導を受けた市川政子は、「戦後アメリカの指導者たちによって習ったのですが、一団のウーレイ先生がよく、くやしそうにおっしゃっていました。『今まで自分は、イギリス式にやって来たのに、今はちがう』と」、「例えば、時間がルーズになりますと、あとからお叱りの電話を受けました。三十分遅れると、『イギリスでは絶対に許されないことです』³⁶との指摘があった、との証言を行なっている。単にアメリカ式に対する批判ではなく戦後の変化をも含むものであるが、戦前のイギリス式補導団を知る他の会員も「アメリカ直輸入的な感じを受け」³⁷た、と述べている。

アメリカ方式で進められたガールスカウトに関して、黒瀬（細貝）のぶ等とともに香蘭の女子補導会東京第1組一期生の吉田（桜井）澄は、戦後、C I Eの協力で準備された地方の講習会に参加し、「これはガールスカウトではない」と抗議した経験があった。彼女は1950年のアメリカ訪問の際にも、「アメリカ本部でミス・ツイーなど関係者と話し合ったのです。スカウトは単なるガールのクラブではない、世界共通の指針をもち、教育方針もあるので、そのようにあるべきだと主張したのです。イギリスのベーデン・ポウエル卿の教育方針です」と述べた。その後、日本のガールスカウトについて「組織はアメリカ式をとって、方法はイギリス式を」³⁸という考え方も生まれたのである。

ガールスカウトの名称についてはC I Eの方針で決定されたこと、女子補導団とイギリス式そのものが「昔風」とされたこと³⁹、への反発もあったが、何より、戦前の補導団がミッションスクール、教会において少数指導が行われていたのに比して、戦後は組織が大きくなるにつれて「大衆化」したことへの批判もそこには存在していた。

第4節 C I E・地方軍政部によるガールスカウトの組織化

(1) C I E・地方軍政部によるガールスカウト結成への支援

前節ではガールガイド結成の背景にある戦前の補導団副総裁、三島純、また聖公会関係の女性の位置について考察した。本節では、地方での具体的な結成状況を視野におきながら、戦後ガールスカウトの結成に際したC I Eあるいは地方軍政部の役割、影響を焦点について検討してみたい。

下記の表は、戦後初期からガールスカウト日本連盟に参加し、役員・主たる委員をつとめた人物について、ガールスカウトに参加する契機をまとめたものである。便宜的ではあるが、三島純との個人的な接点等が大きいものを(a)、戦前から女子補導会・補導団メンバーであったものを(b)、C I Eあるいは地方軍政部の指示、講習会等を契機としたものを(c)とした。

氏名	G S の役職	参加する契機	出身・職業等
三島純	第1代会長	女子補導団副総裁 b	女子学習院、三島通陽の妻
吉田澄	第2代会長	女子補導会 b	香蘭、1937 世界大会参加
野口綾子	第3代会長	タイパー c	東京女子大、前橋女性市議
鍋島敬子	第4・6代会長	三島純の案内 a	女子学習院
古賀みつえ	第5代会長	北海道地区 c	東京女子医専
伊藤幸子	第7代会長	三島純の親戚 a	中央準備委員会委員
高力寿壽子	第9代会長	大阪府室長時代 c	同志社女学校
岸直枝	第11代会長	群馬県 c	女医、群馬県支部創立
三島昌子	第13代会長	三島純の長女 a	女子学習院、少年団少女班
永井かよ子	第15代会長	ウーレイの指導 c	お茶の水大、戦後、香蘭教員
原喜美	初代総主事	関東軍政部教育顧問 c	津田塾大、シカゴ大院
片山登代子	第2代総主事	GHQ 図書館通訳 c	津田塾大、シカゴ大
清水俊子	第3代総主事	埼玉県教委社会教育 c	県女子師範学校
浜田喜美子	第5代総主事	高知県軍政部 c	青少年担当
黒瀬のぶ	中央準備委員会委員	女子補導会 b	香蘭、連盟プログラム委員
藤村千良	中央準備委員会委員	少年団少女班 a	1938 年世界大会参加
橋本祐子	中央準備委員会委員	青少年赤十字 c	アンリデュナン受賞
森本富子	庶務委員長	長崎県教委社会教育 c	地方理事
宮原寿子	第1副会長	女子補導団 b	林富貴子長女
林貞子	中央準備委員会	宮原、三島案内 a	林富貴子の長男の妻
塩野幸子	初代東京都支部長	CIE タイパー通訳 c	YWCA キャンプ委員
大木千枝子	初代プログラム委員長	千葉県教委社会教育 c	千葉県支部創立
加藤恵美子	副会長	女子補導会国際組 b	国際書記、サンガム委員
松下龍子	組織委員長	松山の大学婦人協会 c	G. ジョンソンの指導
小崎朝子	2代プログラム委員長	牧師の父の紹介 c	赤坂霊南坂教会の団創立
尾崎美津子	組織委員長	少年団少女班 a	静岡県支部創立

上記をみる限り、前節で述べたように三島純の親類、縁者、女子学習院の同窓生 (a)、女子補導会・補導団メンバーとミッション・ガイドの経験者 (b) が存在する。しかし、以上に加えて東京の C I E で勤務経験のある女性、あるいは地方講習会、社会教育関係者 (c)、が多く存在することがわかる。

ダーギン、タイパーが中央でガールスカウトを支援した動きとほぼ平行して、占領初期

から日本各地でガールスカウトは組織されつつあった。C I Eから地方軍政部や県社会教育課に対し系統的なガールスカウトの組織化についての指導があった。詳細な資料は少ないが、GHQから社会教育課を担当として各県にしてガールスカウトをつくる指令が出た、という証言がある⁴⁰。実際、各地方軍政部の教育スタッフはガールスカウト育成のために各方面に働きかけていくのである。以下に、いくつかの事例をあげてみたい。

例えば、京都では、1946（昭和21）年6月、中央部で組織化が始まる以前に、第1回女子スカウト運動推進座談会が開かれている。これは、府・市・地方軍政部・元少年団（健児団）員・青年団・子ども会が集まりガールスカウトについての話し合いがもたれたものである⁴¹。この会に参加した下瀬晶子は後日、「突然呼び出されてスカウトの話—中略—なにはともあれボーイスカウトの人たちに助けていただき、スカウトとやらを勉強することになりました」と回想している⁴²。また下瀬は、「軍政部の係官に振り回され、時にはスカウト活動をやめさせられそうになった」⁴³が、その後就任した係官は理解があったとも述べている。そこでは、地方軍政部の教育担当者のガールスカウトに対する考え方・取り組み方によってガールスカウトの普及に影響があったことがわかる。

四国地区の地方軍政部女性担当のG. ジョンソン（Germen Johnson）は合衆国ガールスカウトでの指導経験があり、彼女は四国のガールスカウト結成のために積極的に活動し、東京でガールスカウト関係者、タイパーとの協議も行なわれている⁴⁴。ガールスカウト日本連盟の組織委員長を務めた松下龍子の場合、夫の勤務先であった愛媛県松山市で大学婦人協会の愛媛県支部設立に取り組んでいた際に、香川県高松から視察にきたジョンソンの紹介から愛媛県ガールスカウトが発足した経緯を証言している。また、それが東京での三島純への協力に結びついていく、というものである⁴⁵。

岐阜県の場合は、デービス（Ruth. V. Davis）が岐阜県地方軍政部教育課補佐官として着任した直後の1948年4月22日、軍政部経済課アクトン（Akuton・女性）の協力をえて、ガールスカウト運動を開始するように指示し、5月1日には地方軍政部でガールスカウト発足会を開いている⁴⁶。地方軍政部と県社会教育課が協同で婦人団体や青年団女子指導者らを対象に講習会を開き、そこからガールスカウトが発団された一例である。

東京においても、1947年6月に日本キリスト教団、赤坂霊南坂教会のガールスカウト東京第4団の例があげられる。小崎（芹野）朝子は、神父である父の紹介からコーキンスに出会い、アメリカ合衆国方式のガールスカウトハンドブックを譲りうけて「やくそく」と「おきて」を学び、アドバイスを受けながら団を発足したことを述べている⁴⁷。

これらの点について、タイパーの会議録によれば、タイパーはガールスカウト運動に関して、日本のガールスカウト設立準備のメンバーや地方軍政部の担当者（その多くは女性担当官）と頻りに会談しているが、その他、婦人団体関係者との話し合いの中でも彼がガールスカウトについて述べているケースが多々見られる。例えば、滋賀県連合婦人会副会長の「フジ」との会談において、婦人団体は青少年活動の分野で何ができるかという質問に、タイパーは一番目に、「ガールスカウト、ボーイスカウトを後援する責任を負うこと」

をあげているのである⁴⁸。以上のように、C I Eと地方軍政部は相互に連絡をとりながら、地方におけるガールスカウト指導者の発見と組織結成にも動いていたことがわかる。

(2) コーキンスとトゥーイによるガールスカウト講習会

その際、運動の普及はガールスカウト指導者養成講習会の開催への期待が大であった。これは中央準備委員会によって東京やその他各地で開かれ、当初、そのなかで講師を務めた主要な一人が在日米空軍将校の妻コーキンス (Harriet Calkins) である。1948年4月24日、タイパーとコーキンスが会談している記録がある。それによるとガールスカウト・ニューヨーク事務所がC I Eのタイパーに対して彼女を日本のガールスカウト・リーダー養成を援助する人物として推薦していること、また、会談の際、タイパーはコーキンスと日本のガールスカウト幹部を引き合わせることを約束している⁴⁹。彼女は、都内の駐留軍家族向けの住宅に居住していたが、これ以降、ニューヨークでのガールスカウト・リーダー経験を生かし、東京以外の地域にも講師として出張を行なうことになった。

タイパーの会議録には、その後、さらなるガールスカウト指導者養成講習の充実にむけて、合衆国ガールスカウトからC I Eへの働きかけ・連絡があった。それは、プロフェッショナルな指導者を日本ガールスカウトに「貸し付ける」というものであり、タイパーは渡航許可の便宜を図ることを伝え、その来日する指導者の日本での仕事内容についても提案をしている⁵⁰。1948年10月、この指導者派遣計画が実現した⁵¹。合衆国ガールスカウトの仲立ちで世界連盟の資金援助により合衆国ガールスカウト連盟のM・トゥーイ (Marguerite Towhy) が派遣されたのである。彼女は日本の青年団体の指導者という名目で心理学者、青年教育に詳しい同じく合衆国ガールスカウト連盟理事のサリバン (Dorothea Salivan) とともに来日した。ふたりが、コーキンスと合流し、最初に指導したのが1948年10月に浴恩館で開催された第1回YLTC (青少年指導者講習会) だったのである。

トゥーイ来日以前、日本のガールスカウト準備中央委員会は財政的基礎もなく、小さな集まりであった⁵²。トゥーイは、ガールスカウト指導者養成講習会や財政基盤の確立など様々な面で貢献し、特に彼女の北海道から九州にまで及ぶ指導者養成のための巡回によって、多くのリーダー養成のほか、講師養成課程の準備によって日本のガールスカウト会員は増加していった。その統計は次のとおりである。

49年5月11日現在 少女会員 2068人、大人 595人、100団⁵³

49年8月31日現在 少女会員 3657人、大人 1159人、156団⁵⁴

50年12月29日現在 少女会員 7192人、大人 3276人、565団⁵⁵

以上から、C I E、地方軍政部、ガールスカウト日本連盟結成にむけた中央準備委員会、地方教育委員会、社会教育課の連携による結成の働きかけ、支援によるこの時期の会員増加が理解される。地方での各団はそれぞれ様々な経緯で発団された。具体的に、1948

年前後に発団したところは、婦人会・青年団女子団員、PTAのメンバーなどを集めて開催された地方軍政部やCIEの青少年担当官らの各地での講演（県社会教育課との共催）でGSが紹介されたことなどによって、ガールスカウト運動に関心を抱いた女性たちが推進委員会や団を結成、その後地元で指導者養成講習会を開催するための指導者の派遣を中央準備委員会へ要請する、という事例が多数存在した。当時の状況は、「…次々と要望されるのである。あの県も作るなら、自分の県でも作りたいからきてくださいなどと一。こちらが間に合わないのですよ。みんなで手分けして、2人ずつがせいぜい」⁵⁶というものであった。その後1950年代になると、受講した地方の女性のトレーナーが養成され、各地で独自に講習会が実施された。

各地で団発足に関わった女性には、PTA・婦人会や大学婦人協会県支部等の教育団体・文化団体の参加者、旧補導団員、学生、教師、地域指導層の妻、CIEの職員（例えば、前出のようにダーギンの通訳としてガールスカウトの会合に参加していた塩野幸子、図書館の片山登代子等）、県社会教育課の女性職員等が多かった⁵⁷。ちなみに、岩手における講習の参加者リストによると参加者の年齢は19～62歳に及んでいるが、20歳代前半が最も多い⁵⁸。

それでは、この女性たちをガールスカウト運動に参加させたものは何であったろうか。彼女たち回想、あるいは『ガールスカウトハンドブック』等から読み取れるのは、①彼女たちが戦後初期の社会混乱の中で問題となっていた「青少年不良化」に憂慮し、これを防止し少女を「健全」に育成するものとしてガールスカウト運動に期待したこと、②「婦人解放」の流れの中で女子教育に対する考え方も変化し、社会性をもった女性の養成をめざす活動として期待していたこと、があげられる。のちにガールスカウト日本連盟の総主事になり、当時は埼玉県教育委員会で社会教育を担当していた清水俊子の場合、婦人教育の巡回指導において、聞き手の成人女性たちは説明を理解するが実行がともなわないこと、そのことから、彼女は次世代をになう少女たちの教育へとむかわせたという⁵⁹。さらに、③ガールスカウトが欧米文化イメージを表象するものであり、占領という特殊状況下において、いわば憧憬が存在したことも想起しうる。実際、各団活動のなかでは、運動に協力している欧米人女性や、在日アメリカ人女子のための団（東京、横浜、沖縄等にある合衆国ガールスカウト所属のもの）との交流会、アメリカ人リーダーの自宅でのパーティーやテーブルマナーの学習等が行われ、それらは「豊かな」欧米的な生活を提示する機会ともなっていた。また、少女たちにとってはアウトドアのキャンプ、さらに制服に対する憧れも存在したのである⁶⁰。

（3）ガールスカウト中央組織に対するCIEの指導

CIEは中央組織であるガールスカウト日本連盟結成に向けた動きの中でも詳細な指導を行っている。

初代の青年教育担当のダーギンは、戦前、YMCA主事として30年の在日歴があり、

「知日派で日本の青少年団体の事情に詳しい」彼が青少年教育の担当官であったことは「日本の青少年団体にとって幸運であった」⁶¹。ガールスカウトの再建の過程において、ダーギンさらに後任のタイパーは、会合や資料の提供等を通じて日本の中央準備委員会メンバーに対しアドバイスを行なった。1947年1月のダーギンとの最初の会合以降、「毎月集まって、団員をどのように獲得していくか、リーダーをどう養成してゆくか、などについて話し合いをつづけ」⁶²、担当者がタイパーに交代してからも、月に1回は会合し、委員会やトレーニングの成果などを報告、会の規約、常任委員会の運営、財政問題等について助言を受けている。以下、(イ) 運営資金、(ロ) 全国組織化、(ハ) 「やくそく」と「おきて」について具体的に考えてみたい。

(イ) 運営資金について

戦後初期のガールスカウト運動を理解する際に、他の青少年団体と同じく運営資金の問題がある。GHQ、CIEが戦後に社会教育関係団体に対しておこなった象徴的な政策に「ネルソン通達」⁶³がある。これは、戦前の公的補助金をもとに社会教育関係団体が政府の統制をうけていた、という判断から行政から社会教育関係団体への補助金を禁止したものである。1948年7月、この「ネルソン通達」によって行政からの補助金支出が禁じられて以降、地域のガールスカウト育成組織と地方行政組織の関係についてガールスカウト関係者はタイパーに報告をしている⁶⁴。当時のガールスカウト関係者の証言によると、財源問題について「GHQの干渉はかなり厳しいもので」あり、独自の「財源獲得のためのキャラメルを販売した時には、不正をしていないか確認のため収支決算の帳簿を提示するよう要求された」⁶⁵。社会教育関係団体の「ノーサポート・ノーコントロール」原則をどう維持するかが注目されたのである。財政源としては会員の登録費やハンドブック、スカウトピンの売り上げ、中央部によるバザーや音楽会などの開催のほか、財界、合衆国ガールスカウト連盟(2000ドル)⁶⁶、Christian Women's Association、在日アメリカ女性クラブ(約50万円)、GHQ女性クラブ⁶⁷などからの寄付があった。

(ロ) 全国組織化の問題

なお、地域青年団に対するのと同様、GHQのなかにはガールスカウトの全国組織化に不信感も存在したことも事実である。例えば、1948年9月、タイパーは教育課長オアー(M. T. Orr)に次の文章を送付している。つまり、四国地区からガールスカウト中央準備委員会が「官僚的」「統制主義」であるという批判があったこと、これに対してタイパーがオアーにこの点を釈明・反論する文章を提出しているのである⁶⁸。GHQ、CIEのガールスカウト、ボーイスカウトへの対応は必ずしもひとつではなく、中央と地方軍政部、さらに担当官ごとにも相違が存在した。この点、ダーギン、タイパーは上層のオアーに説明を行い、また各地域との調整をはかり、慎重に組織化を検討していったことがわかる。そのために、青少年指導者講習会の主要都市での開催、各地域でのガールスカウト講習会の実施と指導者養成、グループワークの普及が重要な意味をもったのである。

(ハ) 「やくそくとおきて」の文言について

次に、ガールスカウトの「やくそくとおきて」の文言の問題である。その際、1948年1月に東京第1団で使われていたガールスカウト「やくそくとおきて」の案⁶⁹を示しておきたい。

—約束—

私は名誉にかけて神と国とに対するつとめを行ひ、いつも他人をたすけ、ガールスカウトのおきてを守るようにいたします。

(附則、神でも仏でも可)

—おきて—

- 一、ガールスカウトの名誉は信頼されることである。
- 二、ガールスカウトは忠実である。
- 三、ガールスカウトのつとめは人をたすけ人に役立つ事である。
- 四、ガールスカウトはすべての人々の友達であり他のガールスカウトとは互に姉妹である。
- 五、ガールスカウトは礼儀正しい。
- 六、ガールスカウトは親切である。
- 七、ガールスカウトは規則にしたがふ。
- 八、ガールスカウトは快活である。
- 九、ガールスカウトは儉約にする。
- 十、ガールスカウトは思にも言葉にも行にも純潔である。

これは、東京第1団を担当した後藤八重子のノートに記されたものであるが、繰り返し訂正された後があり、正式な文言が確定するのはしばらく後のことである。ガールスカウトの「やくそく」の作成においてCIEは慎重であった。戦前の女子補導団の「契約」は戦後の「約束」にあたるが、その冒頭の(一)、「私は(神様と)天皇陛下(と)に忠誠を誓ひます」の「天皇陛下」は削除された。後にこの部分は、「私は神(仏)と国とに対するつとめを行ひ」と正式に決定されている。また、戦後最初の要覧である、尾本和栄による『ガールスカウトハンドブック』(48年)⁷⁰の原案は英訳された文書⁷¹として確認が行なわれ、手書きで校正がなされている。(この校正者は、前後のメモと筆跡からタイパーと判断されるが)この書類において、スカウトの「やくそく」のなかの、「神とコミュニティー(communitiy)にたいし義務を果たす」との条には、「communitiy」の箇所「削除(delete)」との意見が手書きで記載されている。その結果、発行された『ガールスカウトハンドブック』には、「私は神と社会とに負ふ義務を果たし」と書かれている。

以上のように、本節では、CIE・地方軍政部によるガールスカウトの組織化について、CIE・地方軍政部によるガールスカウト結成への指示と支援、コーキンスとトゥーイによるガールスカウト講習会という観点から、さらに、ガールスカウト中央組織に対する

C I Eの指導、について運営資金、全国組織化、「やくそく」と「おきて」を中心に検討した。

ガールスカウトはこのようにC I Eと地方軍政部の指導とこれに呼応した教育委員会、青年教育関係者等の日本人の活動によって広められた。1949年4月には、丸の内 Army Education Centerで第一回全国総会が開かれ18県から120名が集まり、ガールスカウト日本連盟として正式に発足した。1952年にはガール・スカウト世界連盟の準加盟国に認可されたが、正加盟国としてみとめられたのは1959年のことであった⁷²。

小結

本章では占領軍の青年教育政策とその政策内におけるガールスカウトの位置、その再建過程と背景について考察した。その構成は、第1節で、占領期におけるGHQ・C I Eの青少年政策―連合軍による占領状態の下で、民間情報教育局の青少年教育の展開について検討した。第2節では、女子青年団体としてのガールスカウトへの注目について考察し、その際、(1) C I E・文部省の女性、少女の活動への注目、(2) ガールスカウトの理念・方法と青少年教、(3) ガールスカウトのメンバーの検討を行なった。第3節では、ガールスカウトとして発足する背景としての戦前の女子補導会・補導団等との関係について考察した。その上で、第4節において、C I E・地方軍政部によるガールスカウトの組織化について確認した。

ガールガイドは戦前の大正期にイギリスから日本に紹介、導入され、キリスト教関係者を中心とした小規模な活動であり、それは第二次世界大戦中の1942年に一度解散している。戦後、日本は、アメリカ合衆国を中心とした連合軍によって占領され、C I Eの青年教育担当を中心とした指導によって戦時中に解散したガールガイドは、アメリカ式にガールスカウトとして発足した。その際、戦前の女子補導団関係者、C I Eの日本人スタッフ、地方の教育関係者が多く参加し、またGHQ、地方軍政部のアメリカ人スタッフも母国での経験から結成に協力している。女子の青年教育活動として、さらに欧米の文化を背景とし、そのグループワーク理論から多くの青年教育団体のモデルとなった。他の多くの社会教育関係団体は、戦前の軍国主義・超国家主義への協力を理由として解散、改組の命令を受け、地域網羅の組織原理を批判されていた。そのような団体に対してYWCA、YMCA、ボーイスカウト、青少年赤十字とともに民主的青年教育のモデルとして提示されたのである。グループワークの内容と方法はY L T C、I F E L等の青年指導者講習会等を通じて紹介され、合衆国ガールスカウト連盟の理事、トレーナーが日本のガールスカウト育成と他の青年団体指導の講師としても招聘されたことはその象徴的出来事であった。1949年4月には、ガールスカウト日本連盟として正式に発足し、1952年にはガール・スカウト世界連盟の準加盟国に認可されたが、1959年に正加盟国としてみとめられている。

註：

- 1 文部省次官通達「青少年団体ノ設置並ビニ育成ニ関スル件」1945年9月25日。
- 2 同前。
- 3 同前。
- 4 大日本青年団女子部規程。
- 5 前掲『少年団の歴史』309ページ。
- 6 同前。
- 7 小川利夫・新海英行編『GHQの社会教育政策—成立と展開—』大空社・1990年、56ページ。
- 8 Youth Organizations and Student Activities, 20 June 1946, Trainor Collection, Lool No.57
- 9 Present Status of Youth in Japan :Donald M.Typer, Trainor Collection, Lool No.58, Jan.5,1948
- 10 タイパー、ダーギンについては、拙著「占領期社会教育の研究 - D.M.Typer Conference Report を中心に」(『日本社会教育学会 第37回研究大会課題研究発表集録』およびレジ目、および、拙著「寒河江善秋研究」大槻宏樹編『社会教育と主体形成』成文堂・1982年を参照されたい。
- 11 前掲「占領期社会教育の研究 - D.M.Typer Conference Report を中心に」18-21ページ、および『D.M.Typer 会議録』(財団法人日本青年館資料室蔵)。
- 12 駒田錦一・佐藤幸治・吉田昇編『青少年教育』(朝倉書房、1951年、154頁)に引用されたアメリカ教育評議会(American Council of Education)による統計をもとに作成した。
- 13 CIEの青年団組織化に関する対応については、拙著「戦後青年団の全国組織化過程 - 日本青年館の解散団体問題と占領軍の対応を中心に」『文学研究科紀要』早稲田大学大学院別冊第17集・1990年、を参照されたい。
- 14 To: chief, Education Division, From: Chief CIE, Subject: chapter XV, Date: 12 Aug. 1950, Trainor Collection, Lool No.58 (以下 Trainor Collection は、国立国会図書館蔵のものを使用した。)
- 15 『昭和23年10月4日～15日 青少年指導者講習会議事要録綴』(財団法人日本青年館資料室蔵)。なお写真はガールスカウト日本連盟所蔵のものであり、出席者については青年団、ガールスカウトに関係した多くの方々の証言と前記の要録綴の内容を照合によって確認した。
- 16 同前『昭和23年10月4日～15日 青少年指導者講習会議事要録綴』および『財団法人日本青年館七十年史』1991年・500 - 503ページ。
- 17 社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習Ⅱ - 社会教育実践の展開』の第3章「共同学習論提唱への歩み」、第4章「日本青年団協議会における共同学習提唱の背景」、および前掲「寒河江善秋研究」等を参照。
- 18 ガールスカウト日本連盟『半世紀の歩み』1970年、およびガールスカウト日本連盟『ガールスカウトハンドブック続編』1950年を参照。
- 19 同前『日本のガールスカウト運動』52 - 53ページ。
- 20 ガールスカウト日本連盟『日本のガールスカウト運動』2000年・10ページ。
- 21 三島純および三島昌子への聞き取りによる。1999年10月30日、於、三島宅。
- 22 三島昌子『バァーバはガールスカウト』2000年、54ページ。
- 23 同前3-4ページ。
- 24 同前。
- 25 ボースカウト日本連盟『日本ボーイスカウト運動史』1973年・229 - 239ページ。
- 26 前掲『少年団の歴史』303ページ。

-
- 27 前掲『日本ボーイスカウト運動史』231-232 ページ。
- 28 三島純および三島昌子への聞き取りによる。1999年10月30日、於、三島宅。
- 29 ガールスカウト日本連盟資料室には、ガールスカウト結成にむけた1947年1月22日の会合の開催案内への礼状（井原たみ子、山口敏子）が保存されている。
- 30 GHQ/SCAP Records, Box No.5722, Sheet No.CIE(C) - 04448（以下GHQ/SCAP Recordsは、国会図書館蔵）。
- 31 Typer Report of conference・日本青年館蔵。
- 32 GHQ/SCAP Records, Box No.5722, Sheet No.CIE(C) - 04448。
- 33 「黒瀬のぶの手紙原稿」（1948年当時のもの）ガールスカウト日本連盟所蔵。
- 34 同前。
- 35 同前。
- 36 「東京都支部二十年の歩み」『明日へのはばたき』ガールスカウト日本連盟東京都支部・1970年、16ページ。
- 37 同前。
- 38 同前、15ページ。
- 39 同前、14ページ。
- 40 前掲『半世紀の歩み』57ページ。
- 41 同前、235ページ。
- 42 『半世紀の歩み』69ページ。
- 43 同前。
- 44 Typer Report of conference, 5 Dec 1947。
- 45 前掲『半世紀の歩み』65ページ。
- 46 志知正義『戦後岐阜県青少年教育史』教育出版文化協会、1980年。
- 47 前掲『半世紀の歩み』66ページ。
- 48 Typer Report of conference, 12 Feb 1948。
- 49 Typer Report of conference, 24 April 1948
前掲『半世紀の歩み』65ページ、清水俊衣『いつも明日を―ガールスカウト賛歌』（1996年、200ページ）の回想ではコーキンスは1947年に既にGS活動に従事していたとなっているが、他の資料からみてもコーキンスは48年春からGSに関わるようになったと推測される。
- 50 Typer Report of conference, 21 April 1948
- 51 前掲『半世紀の歩み』より。
Typer Report of conference, 12 July 1948では、Twohyは7月10日来日となっている。
- 52 ガールスカウト日本連盟『ガールスカウトハンドブック 続篇』。
- 53 前掲『半世紀の歩み』を参照。
- 54 『ガールスカウト日本連盟 会報』No. 3、ガールスカウト日本連盟、1949年。
- 55 『ガールスカウト日本連盟 会報』No. 6、ガールスカウト日本連盟、1951年。
（未登録数を含まない）
- 56 前掲『半世紀の歩み』57ページ。
- 57 『半世紀の歩み』によれば、社会教育課の職員が講習会に参加することは、CIEによって禁止されていたが、戦後初期の段階では普及のためには県の職員に連絡する場合も多く、その際は、「県の人といわずに個人の資格で出席してください」と依頼した証言がある。
- 58 GHQ/SCAP Records, Box No.2641, Sheet No.CAS(B) - 02574。
- 59 前掲『いつも明日を―ガールスカウト賛歌』。
- 60 1948年の『ガールスカウトハンドブック』では、「経済、産業その他の事情に鑑みて制服まだ許されてい」ないと書かれている。B・SもGHQから敗戦後、制服の着用・分列行進・三指の敬礼（B・Sの敬礼法）、信号訓練などが禁止されていたが、1949年には許

可されている。G・Sの制服許可時期は不明だが、おそらく同時期であろう。1951年に制服・制帽が制定されている。

61 前掲『少年団の歴史』302 ページ。

62 『半世紀の歩み』85 ページ。

63 新海英行「占領軍社会教育政策の展開—ネルソン関係文書にみる—」前掲『GHQの社会教育政策—成立と展開—』大空社・1990年、87 ページ。

64 Typer Report of conference ,12 Dec 1950。

65 『半世紀の歩み』70 - 71 ページ。なおタイパーの Report of conference では、1950年3月30日の会合がそれであると思われる。この報告書でタイパーは、この会議から「G・Sの帳簿が、会計係 (the National treasurer) の自宅で保管されていることが明らかになった」といい、即刻全国事務所で保管するよう強く促したと述べる。そして、このような新しい組織にはいかに多くのガイダンスが必要かが明らかになったとの意見が記載されている。

66 Typer Report of conference ,9 Dec 1949。

67 Trainor Collection ,Box No.28, Roll No.26、『半世紀の歩み』を参照。

68 re. Complaints on Girl Scout Developments,2.Sept.1948, Trainor Collection, Box No.28,Lool No.26。

69 後藤八重子ノート『The Girl Guides 1st TOKYO』ガールスカウト日本連盟所蔵。

70尾本和栄『ガールスカウトハンドブック』河北印刷出版所、1948年。

なお尾本は、1939年に『若草〔日本少女スカウトの指針〕〔兵庫教育会〕』を刊行した尾本けえと同一人物かとも考えられるが、これについては更なる調査を要する。

71 Headquarters Kinki Mil Govt Region Apo 301(Kyoto,Honshu) Trainor Collection Box.28 Lool No.26。

72 前掲『半世紀の歩み』を参照。